

皆様おはようございます。5月を迎えました。

つい最近、東北の方で雪が降るとか、積もるとかという天気予報を身でびっくりいたしました。こちらも、最近強い風が吹いたり、朝晩が寒くなったりしています。皆様お元気でお過ごしていただけたでしょうか。

今年のゴールデンウィークはコロナ禍の中、初めての警戒警報のない連休とのこと、ハワイに行く人たち、人であふれる飛行場や駅の映像が流れていますが、連休後にまたどっと感染者が増えないことを祈るばかりです。庄原市でも、昨日は過去最多の28人を記録したようです。どこかの保育所でたくさんの感染者が出たようです。

是非とも皆様方もお気を付け頂きましてお健やかに過ごしていただきたいと願います。

先週は復活の日の夕方、弟子たちにイエス様がお現われ下さり、真ん中に立たれ、息を吹きかけ言葉を語り励まされ、救いをもたらすために弟子たちを遣わすと語られ、翌週にはトマスにも表れて下さった個所からでした。トマスは、「わが主よ、わが神よ」と信じて告白しました。

今日はその次の場面、21章です。

1 そののち、イエスはテベリヤの海べで、ご自身をまた弟子たちにあらわされた。そのあらわされた次第は、こうである。

この節の中でひとときわたしたちの目を引きますのが、「あらわされた」という言葉です。主はまたもご自身の姿を現され、お見せになり、知られるようにして下さいました。14節にもこうあります。

14 イエスが死人の中からよみがえったのち、弟子たちにあらわれたのは、これで既に三度目である。

このようにして、「あらわされた」という言葉が3度出てきます。

主は何度も何度も、3度までもお姿を現され、弟子たちを励まして下さいました。そして今日の御言葉のなかに、「主です」という言葉がまた、3度出てきます。

7 イエスの愛しておられた弟子が、ペテロに「あれは主だ」と言った。シモン・ペテロは主であると聞いて、裸になっていたため、上着をまといて海にとびこんだ。

12 イエスは彼らに言われた、「さあ、朝の食事をしなさい」。弟子たちは、主であることがわかっていたので、だれも「あなたはどなたですか」と進んで尋ねる者がなかった。

まさしく、イエス様は、今回も、ご自身が主であるという事を知らせるために弟子たちにお姿を現して下さいました。それは弟子たちがイエス様を救い主と信じて、命を持つためでした。

31 しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。

2 シモン・ペテロが、デドモと呼ばれているトマス、ガリラヤのカナのナタナエル、ゼベダイの子らや、ほかのふたりの弟子たちと一緒にいた時のことである。

弟子たちは一緒にいました。かつてはおそれの中に鍵をかけて震えていましたが、トマスはどのような理由かは知りませんが集まりの中にいませんでしたが、いま彼らは共に、一緒にいました。

ヘブル 10:25 ある人たちがいつもしているように、集会をやめることはしないで互に励まし、かの日が近づいているのを見て、ますます、そうしようではないか。

21:3 シモン・ペテロは彼らに「わたしは漁に行くのだ」と言うと、彼らは「わたしたちも一緒に行こう」と言った。彼らは出て行って舟に乗った。しかし、その夜はなんの獲物もなかった。

21:4 夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。しかし弟子たちはそれがイエスだとは知らなかった。

彼らは助け合うべく、連れ立って行きました。イエス様が弟子たちを訪れ、お姿を現して下さり、彼らを空中分解から助け出してくださいました。しかしかつては漁のプロであった弟子たちは、腕がなまってしまったのか、その夜は何の獲物も得られませんでした。夜通し苦労したのに、その苦労は報われませんでした。

私たちにもそのようなことがあるでしょうか。努力し、苦労しても報われないこと。生きるために必要であるのにそれが与えられない時。私たちはそのような時、得てして失望のあまり、主を見失います。弟子たちも、彼らのごく近くに、90メートルほど先の湖の岸辺に主が立っておられるのに、それがイエス様だと分かりませんでした。主はお姿を現され、主はその主たるお力を発揮しようとしておられるのに、私たちはそれに気づかないのです。夜通し取ろうとしましたが、ダメでした…。私たちは、それって、ルカ5章の、ペテロが召命を頂いた、大漁の奇跡の場面と同じじゃないか!と気付くのですが、これが自分事となると、気付くことが出来ないのです。そのピンチが、その悲しみが、大きな喜びとなる。復活の主のお力によって、恵みによって、恐れが、涙が、喜びに変わると信じる事が出来ず、悲しさと虚しさに目を奪われて、信仰の翼を失って疲れ立ち尽くす弟子たちの姿がそこにはありました。

私たちにも、困り、悩みぬいた過去があります。この先、どうやっても活路が見いだせない、行き詰った、行き止まり、八方ふさがりと言った状況がありました。しかしその後はどうだったでしょうか。その後、現在、どん詰まったままだったでしょうか。

これからも私たちに襲いかかる熾烈な状況があるに違いありません。しかし、わたくしたちが

忘れてはならないのは、その状況の中に主は共にいて下さるという事です。

5 イエスは彼らに言われた、「子たちよ、何か食べるものがあるか」。彼らは「ありません」と答えた。

「子たちよ」と呼び掛けて下さるお方が、すぐそこに、90メートル先の岸边に立っておられます。私たちは水の上、浮かび、流され、湖からは望む収穫もなく、茫然と虚しく漂っているのですが、主は岸からずっとこちらを見ておられ、私たちが網を打っても打っても何も取れずに肩を落としているのをすべてご存じなのです。私たちは、その存在にも気づかず、孤軍奮闘し、神様はなんで私たちのことを分かってくれず、助けて下さらないのだらうと思うのですが、先刻から、当に先刻から主はすべてご存じなのです。そして、私たちを子よと呼び、食べる物がとれたか、いや何も取れなかつたらう、私には分かっているよと語られるのです。

分かっておられるのならば、意地悪をしないでそこから御力を送って魚がとれるようにして下さいればいいのに。どうして黙ってみているばかりで、助けて下さらないのですか。どうして困り果てた姿を見るばかりにして、意地悪をしておられるのですか。私たちはそのように思ってしまうかもしれません。

20:29 イエスは彼に言われた、「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」。

全てはこの御言葉が成るためではないでしょうか。次には見ずとも信じる事が出来るように、次には見なくても、困難の中にあろうとも、成果が出なくても、「それでも主はいらっしゃる」と告白して、主を信じ待ち望む事が出来るように、主は弟子たちが自分で気づくのをあえて待っておられたのではないのでしょうか。

6 すると、イエスは彼らに言われた、「舟の右の方に網をおろして見なさい。そうすれば、何かとれるだらう」。彼らは網をおろすと、魚が多くとれたので、それを引き上げることができなかった。

これです。これが主の御力です。船の右に網を下ろそうと、左に下ろそうと、前に、後ろに下ろそうとも、魚がいない時にはどうしようもないのです。夜の間、火を焚いて、漁火漁をして、魚がそのあたりにいれば、自然の修正で必ず明るいところに魚はやって来るのです。しかしそれでも来なかったという事は、魚が全然いないのです。それを今更、空が白んでいるのに、私たちはクタクタなのに、再び舟の右側に網を下ろせなんて、ぼんやりと立つあの人はいったい何者だらうか。「子たちよ、何か食べるものがあるか」なんて、一体あの人は何者立って言うのだ。

弟子たちは不思議に思ったことでしょう。しかしまだ弟子たちはそれがどなたであるか、気付かないでいました。

不思議がりながらも、それでもその人の言う通りにしてみるという、実に純情な弟子たちでした。彼らが弟子に選ばれたという事は、主を置いて逃げ惑ってしまうどうしようもない弱々しさの中にも、主のお言葉をすぐに忘れて不安がる彼らのどうしようもない弱さの中にも、こういう純情さがあるゆえであったのでしょうか。

彼らは主のお言葉のとおり網を下ろしました。そうすると、魚がずしりとかかりました。それは見たこともないような魚の大群で、引き上げることなどできないほどずしりとしていました。少し前に時計を巻き戻して、彼らはこんな展開になってびっくりして、そして大喜びするという事をどうやって予測することが出来たのでしょうか。

7 イエスの愛しておられた弟子が、ペテロに「あれは主だ」と言った。シモン・ペテロは主であると聞いて、裸になっていたため、上着をまとめて海にとびこんだ。

8 しかし、ほかの弟子たちは舟に乗ったまま、魚のはいつている網を引きながら帰って行った。陸からはあまり遠くない五十間ほどの所にいたからである。

ついにヨハネは気付きました。(ルカ5章に記されている)あの時の出来事のままだと。「彼は主です。」

ペテロは主のお墓に急ぎ走って確かめた時と同じように、服をまとうとザブーンと湖に飛び込み、泳いで主のもとに近づきます。主は今、私たちと共にいて下さった!主にお会いしたい。彼は全速力で主のもとに近寄ります。90メートルを一体何秒で彼は泳ぎ着いたのでしょうか。2分くらいでしょうか。1分半でしょうか。彼はイエス様に会いたかったのです。彼はイエス様なしには生きることが出来なかったのです。

9 彼らが陸に上って見ると、炭火がおこしてあって、その上に魚がのせてあり、またそこにパンがあった。

10 イエスは彼らに言われた、「今とった魚を少し持ってきなさい」。

11 シモン・ペテロが行って、網を陸へ引き上げると、百五十三びきの大きな魚でいっぱいになっていた。そんなに多かったが、網はさけないでいた。

他の弟子たちも舟で陸にたどり着きました。そこには炭火が起こしてありました。体を温めることが出来るように。そしてイエス様は魚を焼いて、パンを用意して待っていて下さいました。イエス様が用意して下さいた魚に、彼らが獲った魚が加わりました。彼らが獲ったのは、合計で実に153匹もの魚でした。そんなに取ったのに、網は裂けていませんでした。

12 イエスは彼らに言われた、「さあ、朝の食事をしなさい」。弟子たちは、主であることがわかっていたので、だれも「あなたはどなたですか」と進んで尋ねる者がなかった。

13 イエスはそこにきて、パンをとり彼らに与え、また魚も同じようにされた。

14 イエスが死人の中からよみがえったのち、弟子たちにあらわれたのは、これで既に三度目である。

今は「彼が主であることが分かった」ので、誰も尋ねることをしませんでした。私たちも、同じです。イエス様は主で、いつも近くにおいて、私たちのことを分かっている下さり、私たちが分かっているなくても分かっている下さり、「子よ」と語りかけ、恵みをもって接して下さるのです。そのようにして、私たちにお姿を現し続けて下さるのです。

私たちはこの方をまた、見ずとも信じ、信じて命を頂くのです。

◇祈禱；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。思いもよらない祝福に満たしてください。主の恵みに感謝いたします。私たちの苦労も悩みも寂しさも、分かって寄り添い、子よと呼び、必要を満たしてください。まずお方を主と信じてこれからも力強く進ませてください。先のことには分かりませんが、主が私たちといつも共におられることは分かりますから、心から感謝を申し上げます。子供からお年寄りまで、あらゆる年齢の方々が、この時こそ教会にて、イエス・キリストに出会うことができますようお願いいたします。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン